



社会福祉法人 聖隷福祉事業団  
医療保護施設・地域医療支援病院

総合病院 聖隷三方原病院

SEIREI MIKATAHARA GENERAL HOSPITAL

第200号

2021年1月1日発行

発行責任者 荻野和功

編集者 木部哲也

# おおぞら

<http://www.seirei.or.jp/mikatahara/oozora/>

## 「見えやすいもの」と 「見えにくいもの」

木部 哲也

最近の医療の進歩、中でもゲノム医療、再生医療、ロボット工学、人工知能などの発展は、重篤な障害を持つ方たちの治療やQOLの改善にも著しい変化をもたらすようになってきました。

脊髄性筋萎縮症という病気があります。ある蛋白質が十分に作られないために脊髄にある運動を司る神経細胞が失われていく遺伝性の病気です。比較的軽症なタイプから重症なタイプがあり、軽症なタイプでは一端獲得した運動機能が徐々に失われ、重症なタイプでは、生まれたときから全身の筋力の低下を認めます。重症なタイプでは人工呼吸器によるサポートが必要となります。脳の障害はありませんので、後天的な問題がなければ正常な知的発達が可能です。2017年にこの病気に対して、不足している蛋白質を作るように遺伝子の働きを誘導するという治療法が開発され

ました。脊髄が包まれている髄液の中に薬を定期的に投与することで運動機能の維持や回復が見込めるということでした。早期に診断して治療することでより明確な効果が期待できるということでした。早期診断の様々な試みも行われているようです。この病気に関連した医療の進歩としてもう一つ、いわゆるロボットスーツ

（Hybrid assistive limb：HAL）の導入があります。このロボットスーツの一つの機能は、運動を通して学習を支援することです。装着者の脳神経系とHALが機能的に一体化して運動学習のループが何度も繰り返されることで、運動することで脳にフィードバックがかり、動きがより滑らかになるということです。医療用HALを使った治療については、すでに筋萎縮性側索硬化症や筋ジストロフィーなど8つの神経筋難病が公的医療保険の適用対象になっていて、脊髄性筋

萎縮症もその一つです。今後さらにこのような技術革新の果実が、障害を持つ方たちに広く行き渡ることが期待されます。

一方、普段の私たちの仕事も、これらに匹敵するものがあると思っています。それは、効果の見えにくいものかもしれませんが、人と人の相互関係で成り立つものです。

脳には「可塑性」という性質があります。発達期の脳や障害を受けた後の回復過程にこの性質が発揮されます。可塑性によってもたらされる脳の変化とは、神経ネットワークのつながり目であるシナプスという場所での情報の伝達効率の変化、シナプス結合の変化です。変化させる要因は、脳への「入力」です。脳への入力とは、外界からのヒト個体への様々な刺激が感覚入力、つまり、「見る」と、「聞く」と、「触ること」などからくる感覚としてシナプスに伝えられます。これらの入力を受動的な環境からの刺激ばかりでなく、個体が能動的に発する運動や行動に対するフィードバックなど、また、思考や感情などの脳内活動によっても

もたらされるということです。思考や感情などの脳内活動には「満足感」、「達成感」、「積極性」や「期待感」などが含まれると思います。

障害の方たちのわずかな表出に最大限の注意を払い、「どんな空間」、「どんな環境」、「どんな見える世界」、「どんな聞こえの世界」がその人たちにとって良い生活か、心地よいものなのかを常に考えなければなりません。私たちはこれらを「一般的活動」とよばれる活動の中で実践しています。また、「満足感」や「達成感」を感じてもらえるような活動のことを「生きがい活動」と呼んで実践しています。これらの「活動」は細かい作業の連続であり、よい感性や気づきが必要されます。効果の見えにくいものかもしれませんが、職員はこれらの理解の基にこれからも適切な生活支援につなげるよう努めます。



## 横地分類

「移動機能」、「知的発達」、「特記事項」の3項目で分類し、以下のように表記する。

例：A1-C, B2, D2-U, B5-B, C4-D

### 〈知的発達〉

E6	E5	E4	E3	E2	E1	簡単な計算可
D6	D5	D4	D3	D2	D1	簡単な文字・数字の理解可
C6	C5	C4	C3	C2	C1	簡単な色・数の理解可
B6	B5	B4	B3	B2	B1	簡単な言語理解可
A6	A5	A4	A3	A2	A1	言語理解不可

### 〈特記事項〉

C: 有意な眼瞼運動なし  
 B: 盲  
 D: 難聴  
 U: 両上肢機能全廃  
 TLS: 完全閉じ込め状態

### 〈移動機能〉

戸外歩行可	室内歩行可	室内移動可	座位保持可	寝返り可	寝返り不可
-------	-------	-------	-------	------	-------

## すばるの

### 日常活動

榎田なつこの

Aさん(横地分類A1)は、側にいる他利用者と職員が活動する様子や食事場面を注目して見えています。人の動きに加えて手元の細かい動きを注目して見ていることもあり、面白みを感じているようです。食事の場面では、職員がスプーンで食べ物によそい、口まで運ぶまでの動きをじっと見てお

り、一連の流れが面白いようです。  
 Aさんの活動では、じわじわとゆっくり変化していく動きを感じられるものを行なっています。底に穴の空いた透明容器をバットの上に置き少しずつ小豆を入れていき、ある程度溜まってきたからサーッと容器を上へ引き抜いて小豆の動きを見ました。始めは手の平から容器の中に流れて減っていく小豆をよく見えています。容器に半分くらい小豆がたると今度は容器に目が向

き、中にたまっていく小豆を見ています。容器の中が8割程たまってから、サーッと上に引き抜くと小豆が減っていくのを、かすかに口を開き、目に力を入れて集中して見ているようでした。その後、トレーの上で平らになった小豆をじっと見て、少しするとかすかに目元を緩めながら職員の方を見ていました。変化に面白さを感じているようでした。



Bさん(横地分類A1)は、普段の生活のなかで細かな音に耳を傾けています。近くで他利用者が行っている語りかけや歌いかけなどの声を聞いています。またCDの音楽やラジオの音を真剣な表情で聞いていること



や、時には笑顔で楽しそうに聞いていることがあります。リビングの扉が開く時の「カチャッ」というかすかな音や車椅子のブレーキが介助されるとき「ガチャッガチャッ」という音がすると顔をぐっと上げ、表情を緩め、気持ちが高まったような声を出すこともあります。カーテンが開く「ザザー」という音がすると、音のする方に顔を向け表情を緩めていることもあり何か期待しているようにも感じます。細かな音にも注目してよく聞いているBさんは、グロッケンを使った活動を行いました。1音目が鳴ると顔をぐっと上げて職員の方を向いて真剣な表情でよく聞いています。音が

## BLS係の役割

堀野 桂

完全に消えてしまう前にもう1音、さらに1音…と徐々に音を重ねていくにつれ目を大きく開いて聞いています。音が重なり終わり、徐々に小さく消えていく段階では表情を緩めていました。音の重なりに加えて消えていく音も良いようでじっと聞いていました。

BLS (basic life support)、いわゆる一次救命処置とは、急変者の発見から救命士の到着または病院への搬送までの間、AED (自動体外式除細動器) を使用しながら心臓マッサージや人工呼吸を実施する心肺蘇生 (CPR) のことを指します。聖隷おおぞら療育センターの利用者は年齢層や障害像がさまざまです、生命に関わるような容態の急変といった可能性は少なくありません。生活支援課職員は医療行為を行うことはありませんが、利用者の急変時には救命処置を実施する必要があります。職員は新人研修として院内





でBLSの講習を受けた  
り、定期的なBLS講習を  
受けられたりする機会があ  
ります。おおぞら内でも毎  
年、生活支援課職員全員を  
対象に一次救命処置の技術  
向上を目指してBLSスキ  
ルチェックを実施していま  
す。実施方法としては、二  
人一組になり基本的なシナ  
リオに沿った救命処置の練  
習を行います。練習にはト  
レーニングの為の等身大人  
形や模擬AEDを使用しま  
す。このように手順を身体  
に覚え込ませること、毎年  
繰り返し実施しているこ  
とが身につけていければ、自  
然に動く事ができるようにな  
っていくと期待していま  
す。毎年BLSスキルチェッ  
クを実施している甲斐あつ



て、心肺蘇生にとって最も  
大切な心臓マッサージの手  
技をはじめ、AEDの扱い  
にも慣れた職員が増えてき  
ました。スキルチェックの  
際、受講職員には、実際に  
出会うかもしれない急変者  
はトレーニング用の人形の  
ように服を1枚羽織ってい  
るだけということは無いと  
いうことや、AEDや人工  
呼吸に使うポケットマスク  
やバックバルブマスクなど  
が用意できない場合などど  
うすれば良いかといったこ  
との話をし、イメージト  
レーニングができるよう促  
したりもしています。  
今年度はコロナ禍で、ど  
のようにBLSスキル  
チェックを行うべきか悩み  
ましたが、全職員対象の筆

記によるBLSスキル  
チェックと、在職5年目ま  
での職員を対象に実技のス  
キルチェックを行いました。  
息を吹き込む必要のあ  
るポケットマスクは使用せ  
ず、手でバックを揉んで空  
気を送る事の出来るバック  
バルブマスクを使用した練  
習を行いました。

私たちはいつどこで急変  
者のいる場面に遭遇する  
かわかりません。そのような  
場面に遭遇したときにどう  
すれば良いのかという不安  
ではなく、BLSの技術を  
活かし適切な処置を行い人  
命救助につなげられると考  
えています。これからも繰  
り返してBLS講習を実施  
していきたいと思えます。

## おおぞら 時の人

おおぞらでは、現場職員  
以外にも多くの方が様々な  
形で利用者の生活を支えて  
います。今回紹介するのは、  
施設課ハウスキーピング係  
の鈴木恵さんです。鈴木さ  
んは、約10年半おおぞらで  
働いています。現場職員に  
はなかなかできないような



修理、製作等を担当してい  
るおおぞらには必要不可欠  
な存在です。どのような方  
がどのような仕事をされて  
いるのかをインタビューし  
ました。

**Q: 主な仕事内容を  
教えてください。**

利用者衣類等の修理およ  
び改造、名札付け、利用者  
が使用するマットやクッショ  
ンのカバー等の製作、当て  
布切り、マット類(足ふき、  
呼吸器用、ぞうきん)の製  
作、おおぞら職員ユニフォー  
ムの修理・交換等の窓口、  
施設課の業務などです。衣  
類等の修理、加工、製作は  
普段はやらないような加工  
が多いですね。

**Q: この仕事に就いたきつ  
かけを教えてください。**

子どもを保育園に預ける  
タイミングで、仕事を探し

ていた時期に、聖隷三方原  
病院で勤務する夫から、お  
おぞらで衣類等の修繕の仕  
事の後任者を探しているけ  
れどどうかとすすめられた  
ことがきっかけです。

**Q: お裁縫はいつから  
やっていたのですか？**

縫い物は小さい頃から好  
きで、小学生の頃からリカ  
ちゃん人形の服を作ってい  
ました。その当時は型紙で  
作ることはしないで、人形  
に布を当てて切り出して手  
縫いで作っていました。ミ  
シンを使えるようになって  
からは自分の洋服を作っ  
ていたこともありました。お  
裁縫に限らず、何かを作る  
と言うことが好きで、お菓  
子やパン作り、DIYなど  
を休日に行うことが多いで  
す。今は革細工に興味があ





ソファーカーバーの製作です。カーブが多かったので、その部分をぴったり合わせて作ることが大変でした。いつもなら型紙を作って製作するのですが、曲線が多くて型紙で製作できず、布をソファに当ててしつけをしながら作りました。利用者のお気に入りソファというので、完成できて良かったです。

**Q:これまでで一番大変だった依頼は何でしたか？**

洋服では親御さんががっかりしないようにとにかく丁寧に作ることに。体に当たる部分は特に気を使いますね。その他の製作物では使いやすい丈夫で長持ちできるように縫製を心がけています。

り、いつか学びたいと思っています。

**Q:仕事をすることで心がけていることはありますか？**

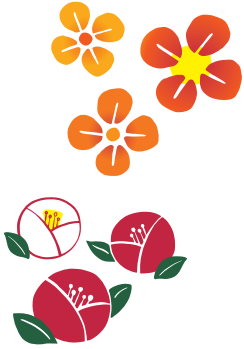
「恵さんがいてくれてホント助かる」などと言ってもらえたり、自分が作ったものを実際に使っている場面を見ると嬉しくなります。自分が必要とされていると感じます。

**Q:仕事ではどのような時にやりがいを感じますか？**

これからも、おおぞらにとって必要な存在でいられるよう、頑張りたいです。これからもよろしくお願ひします。

**縫製のボランティアをしてくださった皆様へ**

昨年度まで多くのボランティアの皆様にお手伝いをしていただいております。衣類の修理が減ったことや新型コロナウイルスの影響もあり、ボランティア活動を終了させて頂きました。長年の間、おおぞらのために縫製分野を支えていただき、本当に感謝いたします。ありがとうございます。



## 職員による訪問コンサートを開催しました

今年はフェスタおおぞらが中止になり、恒例のコンサートも中止となりました。そこで、生活支援課の有志3名によるコンサートを11/10に行いました。

三線やギターの演奏と歌で、子守唄（童神）、涙そうそうを披露しました。1～3号館の各ゾーンを訪問して行い、美しい音色が流れあたたかな空気に包まれました。



「左より 加茂、堀野、船越です」

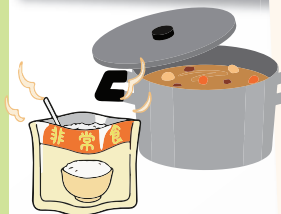


## 炊き出し訓練を行いました

11月20日に地震発生後想定で非常炊き出し訓練を実施しました。

厨房スタッフを中心に参加し、防災倉庫にて炊き出しに必要な器具・備品の準備と操作確認を行いました。

非常時献立確認、アルファ米の作成方法確認後、実際に災害時の調理方法を学ぶために備蓄倉庫のガスバーナーを使用して火を付ける操作手順や非常用の味噌汁を作り、防災に対する知識を深めました。



	9月	10月
ショートステイ利用者数 (延べ利用日数)	56人 (285日)	62人 (299日)
放課後デイ利用者数 (延べ利用日数)	25人 (83日)	25人 (102日)
実習者数 (グループ数)	3人 (2グループ)	3人 (2グループ)